

氏名(本籍)	安藤 聡 (東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2522号
学位授与年月日	平成22年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ナルニア国物語解説 - C・S・ルイスが創造した世界 -
主査	筑波大学教授 博士(文学) 江藤 秀一
副査	筑波大学准教授 博士(文学) 中田 元子
副査	筑波大学講師 博士(文学) 清水 知子
副査	筑波大学名誉教授 博士(文学) 山形 和美

論文の内容の要旨

本論はイギリスの作家C・S・ルイスの代表作である『ナルニア国年代記』全七巻について、それぞれの巻で扱われている主題に注目し、それらすべての巻に共通する主題を明らかにして、文学者・研究者・信仰者・物語作家としてのルイスがナルニア国の物語を通して何を訴えようとしたのかを解き明かした論文である。

序章ではルイスがナルニア国についての七つの物語を書いた理由について、「物語と宗教性」、「想像力と信仰」といった点から考察し、あわせて、ルイスのメッセージを正しく受け取るための読むべき順序の問題を扱う。その順序とは出版された順に読むか、それとも年代記物語の歴史的順序に従って読むかという問題であるが、筆者は第一の立場をとる。

第一章では『ライオンと魔女』における理想的世界としての過去、憧れと想像力の関係、原罪としての傲慢と回心といった問題を論じる。本巻にはアスランの復活、ナルニアの春の復活、そしてナルニア国における過去とのつながりの復活など、さまざまな復活の場面が見られることから、筆者はこの第一巻を「復活」の物語として位置づける。

第二章では『カスピアン王子の角笛』における「黄金時代への帰還」という主題を考察する。本巻の出された1950年代は第三次ファンタジー黄金時代ともいえるべき時代であり、この時期に「過去とのつながりの回復」を主題とした多くの優れたファンタジー童話が書かれたが、『カスピアン王子の角笛』もこの流れと密接に関係していると論ずる。また、本巻は過去とのつながりを失った時代のナルニア国に生まれた主人公のカスピアンを、正統なナルニア国の後継者に成長させるための冒険物語とも解釈できることを示す。

第三章では『朝びらき丸東の海へ』を同じくルイスの作品である『痛みの問題』との関係から考察する。前作の登場人物たちは年齢を理由にナルニア国への入国が不可能となってしまうが、この『朝びらき丸東の海へ』では新たな登場人物としてユースティスを登場させ、東の果てへの航海に参加させることになる。そのプロセスに「痛み」が重要な意味を持つことを論じる。

第四章では『銀の椅子』における同時代批判と、そこに暗示される「悪しき同時代」への対処方法を読み

解く。筆者は悪しき時代の元凶を想像力の衰退であると捕らえ、誘惑に感化されやすくなった同時代の問題を解決する唯一の方法は想像力を回復することであると本巻では強調されていると解読する。

第五章では『馬と少年』の主人公シャスタがナルニア国の隣国アーケンランドの王子としての自己を回復する過程における「礼節」の意味について考察し、原罪としての傲慢という重大なテーマが『ナルニア国年代記』の「外伝」にふさわしい軽妙さをもって扱われていると、筆者は論じる。

第六章ではナルニアの天地創造と最初の悪の介入を語る『魔術師の甥』における善と悪の関係を分析する。この巻ではこれまでの作品以上に善と悪が対照的に提示されるが、それは聖人でない凡人が善を成すためには悪を知ることが不可欠であることを本巻が強調しているからであると筆者は結論づける。

第七章では賛否両論が拮抗する『最後の戦い』をルイス的終末論の物語化として積極的に評価し、一般に批判の対象となっているこの物語の「残虐性」やスーザンが「真のナルニア」から除外されている事実を、自由意志による選択の厳格さを示すものと解読する。

第八章では『ナルニア国年代記』の語り手について考察する。この物語の語り手は古い時代のスタイルであり、語り手と読者の同意が成立することを前提としていること、また全知的な語り手が特定の登場人物の視点に限定した立場から語るの、登場人物の想像力と読者の想像力を一体化させるルイスの試みであると考えられるということを具体的な場面を例示して論じる。

第九章では『ナルニア国年代記』の風景の扱い方にルイスの「現代性」が見られることを、ルイスが多大な影響を受けているスペンサーの『妖精女王』と『ナルニア国年代記』を比較することによって明らかにする。ヨーロッパ絵画史からも明らかのように、風景に対する関心は近代以降のものであり、そこにルイスの「現代性」を見出すことができるとの結論に達する。

第十章ではこれまでの考察を踏まえて、物語作家ルイスとキリスト教弁証家・中世ルネサンス文学研究家・宗教作家としてのルイスとの関係を再考察し、ルイスが『ナルニア国年代記』を通して表現した「言うべきこと」を解読する。別世界的で同時に家庭的なナルニアの風景と雰囲気は、現実と非現実の対照をなした並置を「理想的な風景」と考えるルイスの想像力の産物であり、各種神話やスペンサー、マクドナルドからオーステインに至るさまざまな文学の影響の産物でもある。それはルイスの生涯における家庭的なものや過去とのつながりの喪失とそれに対する憧れと密接に関係しており、それぞれがすべて密接に結びついているということを筆者は強調している。

審査の結果の要旨

本論文はイギリスの作家C・S・ルイスの代表作である『ナルニア国年代記』全七巻について、各巻ごとの主題とその意味するところを詳細に検討し、ナルニアの物語が単に児童向けファンタジー作品ではなく、作家として、学者として、そして宗教家としてのルイスのあらゆるエッセンスが凝縮されていることを明らかにし、ルイスの創造したナルニア国の特質とその意味を明らかにしようとする意欲的な論文である。

C・S・ルイスは児童文学作家として日本でも著名であるが、オックスフォード大学にて英文学を学び、ケンブリッジ大学で中世およびルネサンス文学の主任教授を務めた学者でもあった。またキリスト教関係の著作も数多くあり、宗教家としても知られている。『ナルニア国年代記』全七巻は彼のそういったさまざまな面のエッセンスが凝縮された作品とされており、ルイスの創造したナルニア国の特質とその意味を読み解くには彼のすべての作品との照合が必要と考えられる。とりわけ宗教面では「痛み」の問題、文学面ではルネサンス文学からの影響といった問題を検討する必要があるが、論者はルイスのそのような多方面にわたる活動について、その自叙伝をはじめとする全著作物を参照することはもちろん、『ナルニア国年代記』についての主要な先行研究をほぼ余すところなく取り上げている。その結果、ナルニアの物語が単に子供た

ちにとっての楽しい物語ではなく、虚構と現実の微妙な関係を用いた「途方もない世界」の創造であるという新たな読みを提供しようとしていることは高く評価される。特に各巻の視点の用い方の特徴とその相違をもとに『ナルニア国年代記』が同じ1950年代に書かれた他の作家による児童文学作品とはタイプが違ふという点を論じる章は、ルイスの文学論を考える上でも、また文学の時代性という問題を考える上でも示唆に富む。さらに、『ナルニア国年代記』の持つ物語性と宗教性が全七巻をどういう順序で読むかという問題にも深くかかわっているという主張にも説得力が感じられる。

もちろん残された課題がないわけではない。『ナルニア国年代記』の持つ時間の流れの特殊性に関する考察や激動の時代とされる1950年代に発行された際のルイスのメッセージの受け取られた方についての解明もナルニア国の特質と意味をさらに明らかにすることであろう。あるいは『最後の戦い』における「開かれた結末」とルイスの「現代性」と「伝統」の関係への考察も今後の課題となろう。とはいえ、これらの課題はナルニア国物語のさらなる解明を求めるものであり、本論文の価値そのものを減ずるものではない。

論文審査ならびに審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。